

厳かなる神の巖。縦に裂けている。鱗龍之裂は、まるでBlues Harpの裂帛だ。黙して語らぬこの巖すらも知る真理がある。花鳥鱗獸、いわんや。その真理は俺に關係なく、俺を叡智の栄冠で莊嚴せず、俺の幸せのためには、何の役にも立たない。特に不幸にすることすらも、ないかもしれない。俺に触れず、俺の外にある。俺には触れられない。俺すらも知らないことだ。

それは当然だろ、アメリカ西海岸独身三三歳一人暮らしのエドガーが何を考えているかなんて俺は知らないし。

知っていたとしても、知覚は無効なんだと言えるが、いや、そんなところ、人の思考(Logic体系の球体)の外にある。触れられない。すべてLogicが正しいことが前提で、その球体から俺たちが出ることは不可能。それもLogicの造った戯れであることを晒すLogicの企みは何だろう。

戯れさ。戯論だ。そして、それ(Logicの体系を「戯れさ」と切り捨てる批判)も範疇。